

あった。目をつむるとあの日の二人の姿が彷彿として浮かんできくる。万感胸に迫って私はしばし時の移るのを知らなかった。私は時の流れを三年無為に終わらせてしまった腹立たしさを感じた。衰えた体力の回復に専心しながら、とり残されてしまった自分の現代感覚の追及に苦心し容易でないことを感じた。

思いもよらぬ虜囚の生活を送り、地獄にも似た生死の境では、人間は教養も体裁もなくなることを知った。本能のままにただ生きることだけしか頭になくなる。

煩惱のなせる業かこれが仏教語でいう餓鬼道なのだろうか。いつ死んでも不思議でない状況の中で生き延びた。これは苦しみに耐え抜いた精神力だけでない幸運にあると、生還した戦友たちはみなそう思っているに違いない。何か不思議な大きな力を思う。それにしても、あれ程に夢見た帰国を不幸にして果たすことなく異国に果てた戦友を思うと、限りなく胸が痛む。英霊たちよ、日本は戦いに敗れたが、平和国家として立ち直っている。安らかに眠って欲しい。そして祖国の発展を見守って欲しい。

#### 【執筆者の紹介】

住 所 立川市栄町三一五六―一七

生年月日 大正十年八月二十一日

全抑協立川支部員として古くよりシベリア抑留者の諸運動などに参加して多大な業績を残され、現在でも支部として重要な人物です。

(東京都 石川 祐常)

#### 開戦より復員までの記

新潟県 真 嶋 藤 作

#### 開 戦

どんよりとした雲が今にも落ちて来るかと思わせる、はつきりしない天気であった。

満州はそれまで、避難地ぐらいに思われていたし、平穏な楽土としか感じられない別天地であったと思われた。ところが八月七日、突如寝耳に水の大音響を伴

う爆弾の投下によって、この棄天地も一転して内地、そして南方と同格の戦場と化したのであった。さすがに覚悟はいつも持ち続けてはいたものの、いざその境地に立たされてみると、身内がしまり、緊張と覚悟で緊迫感が全身を覆った。

我々兵としては、いつ、いかなる命が下ろうとも敵を迎え撃つ気概が全身に充溢して、緊張の連続であった。そして八日は、中隊でも、大隊命令がいかに伝達されようとも、引き締まった緊迫した気持ちで、細部にわたる兵器等の整備に余念がなかった。九日には大隊本部の置かれた牡丹江に近い海浪<sup>カイロウ</sup>方面が終日爆弾を投下され、我々の駐屯地蘭崗も本部から数キロしか離れていない場所にあつたので、すぐ近くで落雷のような爆音が終日、兵舎の近くまで聞かれ、いやが上にも戦闘への心をはやらせていた。命令一下それ！の気迫が日ごとに充実していった。そして今日もどんよりとした雲におおわれた十三日、遂に我々にも出動の命が本部から伝達された。

我々独立輜重兵第四十五大隊第三中隊は、十八年一

月に召集されて以来、蘭崗に移駐する前は、勃利県杏樹に駐屯し飛行場大隊の整備作業のような仕事で主であったが、翌十九年三月、この地、蘭崗に移駐し、先に駐屯していた第五中隊と合流したのであった。午後四時頃、待っていた出動命令が遂に下り、それから夕食もそこそこにして、各自の持ち物、兵器の充実に遺漏のないよう入念に身辺を整え、棄棄盒にはもちろん、雜囊に一杯銃弾を詰め、腰の重くなるような出立ちである。

さて、いよいよ落日を待つて中隊は万全の装備を整え、営前に整列し、中隊長より「これよりソ連と一戦を交えるが、各自遺漏のないよう日頃鍛えた戦闘精神をもって万全を期してもらいたい」旨の訓辞があり、「まずはこれより大隊本部のある海浪に向かい本部と合体して、一面坡<sup>イェンパ</sup>方面に向かって前進し敵を迎撃する」旨の訓辞が終わり、出動に移る前に隊の前進体形、そして先導としての命令があつた。

まず第一番に、「これより出発するに当たり、真嶋兵長は部下一人（ラッパ手）を連れ、中隊の前方三百

メートルを前進、前方の警戒に当たるべし」の命令が自分に下った。「ハッ」と緊張しながら命令を復唱し、高木ラッパ手に「行くぞ」と一言して中隊の前方に歩を進めた。高木ラッパ手は同年兵であるが上等兵である。「オイ！高木、俺とお前はイの一番にやられるクチだが引き締めて行こうぜ。内地はお盆の十三日だな、俺達は盆仏か」と一言、一言して千メートルも行ったところで、何者か、車のライトを照らして我々の前に止まった。「誰か」と誰何する。「オ！本部からだ、三中隊か、命令が変わった。一面坡方面行きは中止、方向変換して東京城方向に向かう」「ハッ」と承知して隊長に連絡すべく馬首を返したが、それより先、車は隊長に近づき部隊長命令を伝達、輓馬輜重隊の隊列を変更「半輪に左へ！」いわゆる退却態勢となり、前方警戒命令の行動は正反対行動となり、我々は逃げの態勢の前方を進行することになり、三百メートルどころか、輓馬がガラガラと車の音を響かせながら急ぐわけにもいかぬままに、二人の先行乗馬の我々からたちまち千メートルも、千五百メートルも離れて行進す

ることになった。一番先に敵と衝突するつもりが、一番先頭を逃げる形となった。途中龍宮城をかたどった東京城を過ぎ、飛行場の焼け落ちる様を横目に見ながら、敗色の軍は暗闇の道を退く悲哀さを味わいながら黙々と行進を続けた。

鏡泊湖を横に見ながら進行して行った。明けて十五日、鏡泊湖の山道に入った。その頃から頭の上を飛んでいた敵の飛行機の数が急に減って、二、三の機影しか認められなくなった。鏡泊湖のほとりで大休止となり、こんこんと湧き出る水のうまかったこと。しばらくは流水の綺麗さと冷たさ、うまさで水辺を去る気にはなれず、心ゆくまで水を飲みまくった。その時、車両の積載物の点検があり、車両に積んだはずだった戦時名簿、留守名簿等がなくなっていたことがわかった。この書類の警護責任者である曹長と自分（功績係）が当然、責任上その書類の整備発見の命令を隊長から受けた。今来た道を戻り書類を見つけてくるよう厳命が下った。振り返って今来た方向を眺むれば、兵に続く開拓団、在留邦人の家族が延々として長蛇の列となり、細

道一杯に果てしなく続いていた。この道を戻って果たして書類は発見出来るのか、ソ軍の迫撃砲の音が時折聞こえてくる。

「佐藤曹長と真嶋兵長は今から戻って書類の確認に行ってきます」と復命し行こうとすると、無二の親友である桶川喇叭手が「佐藤曹長と真嶋を見殺しにすることはできません。隊長殿、桶川もやって下さい！」と隊長に願ひ出た。隊長は「ウン」と言っただけで下をさし、するとまた一人、渡辺兵長も「隊長殿、渡辺もやって下さい」と。結局四人で行くことになったのである。この時ほど真の友の友情が身にしてみたことはない。先日降った雨によって真土の道路は馬の蹄鉄に吸いついて、打ったばかりの蹄鉄が土に吸いついて、数キロ行った所で満馬の蹄鉄が次々と落鉄して、まず自分の馬の蹄が剥がれ、次いで桶川兵長の馬も落鉄した。それで乗馬で前進は不能となり、しばらく引き馬の状態で行進したが、見かねた曹長殿は「お前達はやむを得ないからその山の上で待っておれ、俺と渡辺が行く」と言っ、自分と桶川兵長はかたわらの山に登って二

人の帰るのをそこで待つことにした。山の上から見渡した様はまことに絵に描いたような景観である。延々人馬の隊列が無限に続いている。逃げる隊列をよけながら書類を求めて進んで行った。二人の騎馬はぬかるみ道を非常に困難をしながらやがて見えなくなっていた。やむを得ず山に残った二人は進むに進めず、引くにも引けずで、どのくらいの時間か山の頂上で二人の無事の帰りを待った。翌日、渡辺兵長も馬が落鉄して前進不能となり、二人のところに戻ってきた。書類なんて簡単に見つかるとは思わなかった。渡辺兵長の言うには「曹長殿は、一人で行ってくるからお前たちは本隊に戻り、この事態を隊長に報告するように」と言われたという。

やむを得ず三人はいずれも落鉄した満馬を引きずりながら、本隊はもう二日も前進したので大分離れてしまったであろうと思ひながら急ごうと思つても、空腹もこたえるし馬もなかなか思うように歩かない。見ると、先行のどこかの部隊に捨てられた日本馬が、あっちこっちにポツンと突っ立っている。「ヨシ！落鉄し

た満馬では使い物にならない、あの馬に乗り換えよう」と三人は元気のよさそうな馬を見つけて、それに乗り換えて本隊に追いつこうと急いだ。そして翌々日、大休止をしていた本隊にようやく追いついた。早速、隊長にこの旨報告、結局曹長殿一人で行きましたと事の次第を伝えた。手ぶらで帰った我々は面日次第もなく、ひたすら曹長の無事の帰隊を待った。

それから翌々日、曹長殿も帰ってきた。書類等どこにもあるはずはなかった。帰った時の曹長殿の顔色は、生きた人間の顔色ではなかった。満人が行く先行く先に暴動を起こし、九死に一生を得て原隊にたどりついたのであった。さしもの隊長も、こうした状況をくんで、その上の責任を問うことはしなかった。しかし曹長殿は、しばらくして「真嶋、隊長は俺とお前に死ぬという気だったんだぞ」とこっさり伝えた。敗けたというところがその時点でわかっておれば、そこまで責任は問わなかったであろうが、その時点では、まだ敗戦など夢にも脳裏にあるはずはなかった。

十八日、鏡泊湖を出発した頃だったと思うが、誰言

うとなく「オイ！停戦になったそうぞ」という声が、あちこちから聞こえてきた。停戦という意味がよく解されず、では、あえて敗戦ということでもなく、当分戦闘状態を休むということか、というくらいに解して、とにかく戦闘状態はなくなるわけかくらいに思いい、道理で二、三日前から敵の飛行機が上空を飛ばなくなつたわけかと、心中とにかくほっとした。しかしそれも束の間、やがて日本は全面降伏とわかり、今までの気概も一遍に消え失せ、空虚な大きな風穴が吹き抜け、夏の強い陽差しのみいやに強く感じた。

二十一日、敦化<sup>トシカ</sup>において武装解除となり、当日、若手将校二人が前の山において「生きて虜囚のはずかしめを受けず」の『戦陣訓』を肝に銘じ自決した。しかし、この敗戦命令も天皇陛下の命よっての行動であり、短気を起こす必要もあるまいと信じていた。

九月一日、中隊長が全員を集め、初めて終戦の詔書を読み上げて、決して軽挙妄動等なきよう、全員揃って内地帰還を果たすよう、重ねての訓辞であった。翌二日には集結地である沙河<sup>サガ</sup>沿<sup>ガ</sup>の大収容所に集結し、行っ

て見たら、二カ月くらい前まで佩劍はけんを鳴らし、肩をいからせて軍を指揮した小隊長（その時は中隊長）が襦袢と袴下だけで、幕舎の中でいかにも敗軍の将そのものとなり消沈した面持ちでこそそこそとうごめいている様子を見たら、つい自分も胸を締めつけられる思いで、見ないふりをして通り過ぎたのであった。

そこで我々はソ連の編成する労働二五〇大隊と命名され、その時点で、これは帰るところかいよいよソ連に送られ、シベリアの奥地で何をやらされるか分かったものではないと観念せざるを得なかった。沙河沿には二週間くらいいただろうか。

十月十七日、沙河沿を出発して愛河に向かって行軍を開始した。それからウラジオに行き内地帰還というソ連側の言い分ではあったが、その頃からソ連の言うことに曖昧な点が多く信用はできなくなっていた。しかし一応帰るための準備くらいはと思い、持ち物等を整備してはいった。その道中には夏草が高く生い繁り、我々の背より高く伸びた道路の両側は見渡す限りの草原である。そのあちこちに墓標が散見され、見れば

「明治何年何月何日、何の何戦死の地」と書かれてあり、誰か建て換えたのであろうか、まだ新しい感じの墓標もあった。思えば、我等の祖先が明治以来艱難辛苦して築き上げたこの満州の地を、我々の時代においていとも簡単にソ軍に引き渡すとは、誠にその不甲斐なさど先祖に対しての申し訳なさで睨にらみが熱くなり、目がつぶれそうな思いで通り過ぎた。

何と馬鹿な戦をしたものだろうかと、今さらながら取り返しのつかない無念さに感涙し、身のえぐられる思いでおのずと頭を下げざるをえなかった。また、道すがらには真新しい星一つの兵隊服装の死体があり、中には腐敗して死臭が近辺に漂っているのもあった。鳥が群がっている辺りには、恐らく数体の遺体が放置されているであろう。誠に敗戦の果ては悲惨と言うよりほかはなかった。我々とても、場合によってはその予備軍かもしれなかった。

石頭せきつらにおいて大休止の際、役割りを、水汲み、薪取りに二人か三人ずつ決めて、一斉に炊飯に入ったのであるが、自分の前までは薪取りで、自分から三人は水

汲みであった。水を汲んで帰ってきたら何やら悲壯感が漂っていた。何であろうかと聞けば、我々のすぐ前にいた薪取り組の二人が、ソ連の唯一の幹線である電柱を切ったとかどで有無を言わず射殺されたとのこと。何と今まで一緒に行軍していた二人もここ石頭で無念の死を遂げたとは、我々の行く末が何やら暗い影におおわれた思いであった。そして目指す愛河には二十三日に、それからは二人を除いて無事到着し、あとはウラジオ行きを待つばかりのはずとなっていた。

十一月三日、明治節、その日は全員整列し遙か故国に思いをいたし、明治の佳節を祝う。やがて我々にも郷里の土を踏む日がくるのであろうか、しかし疑念がどこことなく身辺を漂う感がつきまとった。

四日出発するはずが、一日遅れ、五日にいいよいよ蓋車に詰められ、ウラジオに向かうはずの汽車に身を委せた。しかしどうも変だ。有蓋車の窓という窓は戸締め棒に嚴重に釘付けされている。もうどうなるうとも袋のねずみ同然、風の吹くまま、気の向くまままで善意に解釈は無用である。汽車は東に向かうはずが、西

へ西へと向かっていた。誰か一名磁石を持っていた者がいて、もはや観念せざるを得なかった。そして食事も排便も、五、六時間も走った駅でようやく下車を許されて素早く用を足し、寒さのためゆっくりなどとしておられないし、またせき立てられてもいた。

食事は大豆の煮た物が主だったようだ。自分は幸い、こういうこともあるかと思ひ米を焙って靴下一足にぎっしり詰めていたので、しばらくは飢えには堪えた。そして列車の中で毎夜見る夢は、今まで二十幾年の生きて来し方と短い過去の思い出、そして幾年後、いや何十年後になって白髪の老人となり、浦島太郎同様の姿になって故郷へ帰ることになるのかと、決してよい夢などは見ず、毎夜悪夢にばかり悩まされ続けていた。父母兄弟のことは片時も脳裏から離れることはなかった。

どこかの駅に着くとしばらくは線路を出たり入ったりで、進行しているのか、外の様子など全く判然としない。愛河を出発して十二、三日目頃、夜も明けきらない朝まだき、誰となく、「あれは何だ、日本海か。

いや日本海に至るわけではない。そうだ、バイカルだ」。まるで洋々として海と変わらない。この周辺を一日以上は走ったと思われる。もはやシベリア入りは何の疑う余地もない。先刻過ぎた比較的大きな駅はイルクーツク駅だったのだ。そしてシベリア鉄道から別れた支線のようなところを通過している。

愛河を出発して十四日目、十一月十八日朝ままだきである、タイシュェットから東方四十六キロに入ったところで駅ではない、無人の駅なのか。いよいよ入ソ、重労働の出発点に立たされたのである。そこで装具の点検を入念にやられ、雪の上に持ち物全部、といつても何回も点検を受けたり略奪に遭って、最小限の持ち物しかない。それでもまだそこから選り取って、ほとんど必要最小限度の数点の持ち物、飯盒や箸、スプーンといったくらいに限られた。

数時間、雪の今にも落ちてきそうな、零下十五度もあるうかと思われる厳寒の中に立たされ、ようやく有刺鉄線のある鉄柵の、かってドイツ兵が収容されていたという一部木造の幕舎に入れられた。これが入ソの

労働拠点の始発点となったのであった。時に昭和二十年十一月十八日の暁であった。それから一面日は自活のため、まずは寒さに備えた薪取りが全員の仕事であった。

そして二日後、いよいよタポール(斧)とピラ(鋸)を嚴重な員数検査の上、各作業グループに渡され、積雪五、六十センチから一メートル近くもあるうかと思われる密林の中へ各警戒兵に率いられて、寒さがしんと肌にこたえる松林の中に入って、直径五、六十センチから一メートル以上もある松の巨木を二人挽きの鋸で倒してゆくのである。

そしてその時からいわゆる“ノルマ”なるものを課せられ、それを果たさなければ食事も休息も与えられず、幕舎に帰るのはいつも時間は判然しないが、いずれ暗がりの雪道を、凍傷に注意しながら、無口、無言、誰一人として言葉を発する者はない。余計なことをしゃべれば体力を消耗する。自然の自己防衛策か。帰れば幕舎の中は真っ暗である。持って来たたいまつのみかりを頼りに、パン百五十グラムに大根の少し入ったスー



ブ、飯盒の底に二センチくらいの厚みの量である。握り締めれば二口くらいで終わりである。空腹には堪え難く、道中、松の青葉を摘み口に入れては嘔みながら唾液を起こした。

当初はそれほどでもなかったが次第にノルマの遂行が厳しくなり、作業の量により食糧の量に差別があり、一級から三級まで、一番量の少ない一級食が我々は常であった。やがて寒さと、食糧の欠乏で、すべての人達がやせ細っていった。栄養失調なるものを初めて知った。冬季間の寒さとその糧抹の欠乏、加えて重労働で、遂に多くの戦友が次から次へと倒れていったのである。

十二月二十四日夕刻、戦勝に酔った露兵がクリスマス前夜祭を祝い、夜遅くまで飲み明かしたのであるが、その間、三、四名の我々を使い薪取りである。夜のふけるにつれて寒さが身にしみてくる。いつまで経っても「やめてよい」とは言わない。彼らはいいい気なもので、戦敗国と戦勝国との差が歴然とした。終戦凶会である。

内地で一番寒いのは一月の末から二月の初めである。

とすると、まだ十二月でこの寒さ、果たして越冬する体力があるだろうか。暗澹たる気持ちで、戦勝者と戦敗者の対照に、堪え難い責め苦に堪えなければならなかった。

ところが天は見捨てなかったのか、その厳寒を過ぎ一月に入ったら太陽の輝きが違って来た。何となく陽差しに柔らかさが見え始めてきた。「アレツ」と思った。この調子でいけば、この時期を過ぎればあるいは生き延びることができるのではと内心ホッと安堵感が一瞬よぎった。だがしかし、寒さはそれとしても、雪が消えてから作業は伐採から鉄道の路盤工事となった。ソ連の自家製の松の木をうまく割いた板で造った一輪車を使用するのである。

雪が消えると俄然シベリアは日中の明るい時間が長くなり、午後八時、九時になっても暗くならない。明るいうちはノルマ完遂まで帰さない。ヘトヘトになっても「作業止め！」の号令はなかなか下りてこない。その頃から戦友の多くはバタバタと倒れていった。作業途中で倒れたり、前の晩一緒に並んで寝た友が翌朝

冷たくなっていた。さては今度は自分かと思うと気が滅入ってしまう。スクッ！と起き上がって臍下丹田に力を込めて、「クソッ!!死んでたまるか」と、全身を鼓舞し気を持ち直した。

その以前、まだ寒さの続く三月頃、ラーゲル内に「青年行動隊」と銘打った特別行動隊が編成された。それはソ連におもねる、いわばすり込み隊である。しかし、場合によっては早く帰れる方便に繋がればとかすかな望みを託して、行動隊に志願した。

そしてある日、行動隊の一人一人が、各自が意見、主観を述べ、いずれも揃いも揃ってソ連におもねる、齒の浮くようなソ連讚美の迷句を並べ立てた。いよいよ自分の番が回ってきた。腹の底には皆の言うことに反感を抱いていたわけだから、開口一番「我が日本国の帝国憲法第一条には『大日本帝国は万世一系の天皇を統治す』とあり、第二条には『皇位は皇室典範の定むる所に依り…』と大日本帝国憲法の逐条講義を我流でやり出した。第三条「天皇は神聖にして…」あたりまできたら「やめ！」の停止号令が掛かった。そ

れっきり退席させられ、ラーゲル換えである。行動隊で一花咲かせようと思ったのも束の間、また奥地のラーゲルに移送である。

思惑は完全に裏目に出たわけである、こうなればもはや改心せざるを得なくなったわけである。「物言えば唇寒し」で黙して、ただ黙々と大衆と流れを共にし、事なかれで一日一日を送るにしくはなしと悟り、それからは「無言の行」さながらの、木偶人形のごとき、捕虜の生態よりどうすることも無用であり、またでき得なかったのである。

一番こたえたのは、酷寒零下四十度の夜間のトラックへの積載作業である。六人一組となって、先般伐採してある木材をトラックに積み込むのである。一、二月頃のシベリアの夜寒は格別である。今日も零下四十度にはなったであろう。皆、一台積んでは焚き火にすがりついた。焚き火の火花で顔には小アザができ、外套は火花で小穴が多数焼け跡となって残った。

ある晩、例によって深夜になるとしんしんと気温が下がってきた。腹の底から冷え切ってくる。きりきり

と腹の底から痛み出した。そして焚き火の傍から動くことができなくなり、うずくまった。同志がカンボーイにそれを告げた。仕方なく警戒兵が肩をかして近くの病院に直行である。

こんな所に病院があったのかと思い、中に入った。大した暖も感じないが、まあ外よりはましと示された木製のベッドに横になった。途端、ダーン！という音がした。何かと思っていると「また誰か死んだな、魂が飛んだ」と口々に言い出した。それは二重ガラスの病院の窓に直径十センチくらいの穴があいて、そこから今、死んだ同志の魂が故郷に向かって飛んで行ったのだという。誰か死ぬ度に何か異変が感じられるようで、それが常のようで、皆驚きもせず普通に話し合っている。いずれいつか自分におハチが回ってくることを予感するかのよう、冷え切った悪寒が襲ってきた。微熱が一カ月以上も下がらず、肺浸潤とやらで作業に行かず、ごろごろしていた。自分としては、多少熱が出るくらいで、作業にこき使われるより何倍も結構なことではあったが、当時、入院すれば死に直行する

くらいに考えられ、可愛そうに彼奴もシベリアでお陀仏かと、退院など思ってもいないようだった。

幸い一カ月くらいで退院したが、またまた奥地のラールゲルである。六、七月に入って、やっといい陽気になったかと思えば、今度は蚊とブヨの襲撃である。この蚊とブヨの群棲している灌木を掻き分けての排便には閉口である。終わる頃には真っ赤な血で尻の周辺が溢れた。冬季間の零下五十度、雪が消えるか消えないうちはこの小さい敵に襲われた。所詮ここは人間の住む所ではなかったのである。しかし、幕舎の中に入ってこないのがせめてもの幸せであり、不思議である。この蚊とブヨに耐え切れず気の狂った者もいたようであった。

またその頃、道路の悪さで輸送ができず、糧秣の入荷がなく何日も食事抜きであった。食わざる者は作業はしなくともよいということで、糧秣の来るまで幕舎の中でごろごろしているわけである。しかし、いかに作業抜きでも、二、三日、一物も腹の中に入る物が無いとなると、腹の皮が背にひっつくような感じで、全

然起居動作が不如意になる。そんな体で、いよいよ糧秣が車の動く所まで来たということ、四、五キロ先まで歩いて糧秣を担いで運ばなければいけない。こんな状態で食物が目先にぶら下がれば、誰でも口に入れたくなる。嚴重に言われてはいても、つい糧秣袋をこぼして小穴を開け、何だかわけのわからない物でも生のままかじる。あとでそれが知れて、こっぴどく上司に叱られ、頭を頭蓋骨陥没かと思われるくらいぶん殴られた。もはや食うか食われるかの邦人同士のいがみ合いです。

その頃、『日本新聞』が刊行されていたが、これを思想教育のテキストとして頭が三角になるような、二十幾年育成された日本人としての教科書とはまるで正反対の思想教育が行われた。しばらくは舵棒のとりように困るような船出であった。それとともに共產主義の教育のオルグと称して、ハバロフスク辺りで特殊教育を受けた先鋭指導者（？）が各ラーゲルに逐次派遣されて、いかにももっともらしい論旨をかざして天皇制教育を根本から覆す、いわゆる洗脳に奔走した。

ある日、自分が任命されていた文化部のオルグの役目柄、派遣されてきた中央の先鋭指導者の対応に当たらざるを得ない羽目になった。というのは、我がラーゲルの舎内当番である幹候あがりの至って性格の穩当な申し分のない同志が、舎内全般の取り賄いを受け持って遺憾のない運営をやっていた。たまたま当ラーゲルの弱兵（オカ）が屋外の軽作業に出かけた矢先、にわか雨に遭ったので、該舎内当番である幹候の同志が、舎内にあつた傘を持って出迎えに行つたのであつた。いわゆる温情をもつての行動なのであつた。それをそのとき当ラーゲルに出向いていた洗脳オルグに見つかつてしまつた。その行為に対する討議が開催され、全員集合させられた。

彼の言うには「こうした行為を当ラーゲルにおける同志諸君は何と見るか。自分の思うにはまことに間違つた行動と見るが、諸君はどう思うか」という主旨の論旨であつたと思う。下手に発言すれば咬みつかれると思つて誰も発言する者などいなかった。そうなれば文化部のオルグである自分が黙っているわけにはいかな

い。立ち上がった。「当番同志Mの行為はまことに温情に満ちた行為であると思う。この雨の中を、しかも弱兵が雨に濡れては病を誘発する可能性が十分考えられると感じ取った愛情からであったと思う。かつて我々は本国にいた当時聞いたところによれば、犯罪の七割までが愛情の欠如から発生していると聞いている。ましてシベリアの奥地で愛情のかけらもない境遇にあっては、愛情こそ何物にもかえ難い救いであると思う」と論じ立てた。

それを聞いていた先程のオルグは、やおら立ち上がり「ただいまの同志の発言は誤りもはなはだしい。このような境遇とは何事か。我らが祖国ソ連にはそのような誤れる愛情論は通用しない。そのような愛はいわゆる誤れる愛情であり盲愛であって、害毒でこそあれ、何ら弱者更生の道ではない。そのような軟弱な姿勢は百害あって一利なき、我らが祖国ソ連を冒瀆する以外の何物でもない」。これでは何を言っても通りようがない。物言えば唇寒し……問答無用である。一事が万事、すべて祖国ソ連の言いなりであって、他言の余地

はどこにもない。他言無用、赤旗こそ唯一のシンボルである。それからは言うだけ野暮と口をつぐんで文化部のオルグも辞退した。

以来、民主運動が熾烈となり、今までの厳とした軍の階級制は弊履のごとく踏みにじり、一兵卒こそ幅をきかす下克上はだしの様相と変わり果てた。それにつれてつるし上げの行事が茶飯事に行われるようになり、迂闊な言動は一切できない、まことに窮屈と言おうか、下手に大きなあくびもできないような雰囲気が身边を漂っていた。

事例の一つをあげてみれば、彼、山形県出身のS同志は出征前、満州国の小学校の訓導であったが、私と気が合ってよく身の卜話を繰り返した。彼には二人の子供があり、兄の方は五歳ぐらい、弟の方は三歳ぐらいであったが、いよいよ出征の門出に当たり、長子の方は紅葉のような手をつけて「お父さん、行っていらっしやい」と言って大粒の涙をポタリと落としたりという。弟の方はまだよくわからなかったようであったが、彼はその長子の方を話す度に思い出してか、顔を曇らせ

ていた。

ある日どこから見つけて来たのか、大正琴を持ってきて（大方、日本軍からの戦利品であつたらう）先生らしく何気なく「白地に赤く……」と弾き出した。たちまちつるし上げである。幕舎の全員が集合せられ、彼を衆人環視の中に据えて、その中のリーダー格が散々悪態をつき「ちっとばかり頭がいいから、ちっとばかり字が上手だからといい気になる、こういう男こそ民主運動の敵であり、天皇制の残渣濃厚である」とやる。すると皆が「オーそうだ！ やっちまえ！」と雷同する。そうでなくても吐息も凍るシベリアに天涯孤独でいるのに全くたまつたものでない。彼の心中や推して知るべし、身も世もない切なさである。

ところで、彼とは後日談がある。帰還後、彼と二、三回文通を交わしたが、彼はその後農協に入り、その後教職に復職して教壇に立っていたようである。昭和五十八年、残留孤児の帰還が始まり、何気なく新聞紙上に目をやると、次の帰還予定者の孤児の写真の中にかつて見覚えのある顔によく似た面影が脳裏をよぎっ

た。さてはと思い早速山形に電話、「確かにそうです。今代々木の方に確認に行っています」と言う。だがしかし、肝心の彼は七年前すでにこの世の者ではなかつた。

彼の二子のうち兄の方は現地で亡くなったそうだが、弟さんが一人東京で、中国から嫁さんをもらい、会社勤めをして幸せそうであつた。先般この稿を書くに当たって確認した。

その他多くの事例を想起するが、一例にとどめる。かくして、そうした精神的圧迫と食糧の究極までの不足の中にやがて三年も過ぎ、二十三年十二月下旬頃、いつ帰れるともれない毎日に懊悩していたその頃、帰還への運命の糸の芽生えがいつの間にか培われているのである。

十二月の末、何とも言われぬ、かつてなかったような酷寒の日である。さすがのソ連も零下三十度以下になると作業を中止、気温の上がるまで舎内待機となつた。そういう時は順番を決めて使役に出された。たまに当日は自分の順番であつた。当日の気温は零下五

十度まで計れる寒暖計が壊れて、その時点では何度かわからなかったが、後で当日は零下五十六度まで下がったとわかった。

「えらい日に当たったわい」と中心いやいやながら外に出た。外戸を開けると、すごい勢いで水蒸気が舎内に舞い込んだ。作業は、運転手と二人で十キロあまり離れた場所まで資材の搬送であった。資材を積み下ろして、十分か十五分くらいで急いで車に乗ったのであるが、早くもエンジンが凍結して動こうとしない。やむなくエンジンの下から火を焚いて溶かし動かして車に乗り、二、三回繰り返しながらようやく作業を終え幕舎に帰ったのであるが、舎内に入るや否や、オルグ（役員）が「オー御苦労、実は今委員長の選挙をやったのであるが、候補者の二人が同票であったので、同志Mの一票で決まる、口頭でよいから言ってくれ」という。候補はHとIである。二人は神妙な顔で自分を見つめている。私はすかさず「同志I」と申告した。これで決まったのである。

当時は委員長はラーゲルに一人、絶対的権限を持つ

て、作業にも行かず舎内に残り全般を統帥した。それから数カ月後、当ラーゲルから四、五人のハラシヨラボーターが選抜されて、近日中に帰還が内定していた。ところで当時は、ソ連側の隠密であるGPUがいつも舎内外を徘徊して、思想の定まらないような人物（ソ連のいういわゆる反動分子）を摘発していた。たまたまダモイが内定していた数人が、帰還態勢のため舎内に残り、軽作業である薪割りをやっていたが、間もなく帰れるという気の緩みからか、「オイ！ばかばかしい、こんなソ連のためにこき使われ、何がスターリン様だ。帰ったら糞くらえだ」くらしいのことをひそひそと話し合っているところをたまたま潜んでいたソ連のGPUに聞かれてしまった。さあ大変！すぐさま非常呼集、収容所は蜂の巣をつついたような騒ぎ。全員集合、帰還予定者だった数人を全員で取り巻き、つるし上げること数時間、クタクタの日に遭って帰還どころか、またまた奥地に送られ重労働。いつ帰れることになるのやら。

さて、そこで今度は、反動分子と烙印を押された人

達にかわって誰を帰すことになるのか、このような大惨事があった後だけに、この選抜は誰になるのか、非常に注目され、その価値が数倍にはね上がってしまった。そうした時に前述の委員長、私の一票で決まった彼の威厳ある第一声、鶴の一声はイの一番に「次の帰還者は同志M！」と宣言された。その外二人くらいであった。彼は私にかつての恩返しのためで帰還者の筆頭に指名したのであった。何が幸いするのかわかったものでないとつくづく感銘し、あっちこっちつねつねみて、その真偽を確かめた。

かくして、待ちに待った帰還への軌道に辛うじて乗ることができたのである。思えばまことに長く、つらさの何乗かになる感情が一遍に身边から分けられていった思いである。

かくしてナホトカで一週間ぐらい軽作業を課せられた後、いよいよ帰還船に乗船であった。万感胸に溢れて夢心地であった。船員に「御苦勞さん」と言われて、出された米の飯と味噌汁、梅干し、タクアン、何とうまいこと。この世の中にこんなうまいものがあったの

かと、しばし陶醉した。味噌汁の味は、終生忘れられない美味であった。

それにしても未だ残っている同志はいつ帰れるのか、後ろ髪を引かれるとはこんな思いだろうか。舞鶴の棧橋に出迎えた日本女性のまことに美しいこと、まるで人形さんのように見える。思えば我々は、まるっきり人間並みではない、別世界からこの世の中に再生させられたのである。

我々より二、三日早く着岸した明優丸の同志は、船内で下船手続きを拒み、下船が我々より遅れたようである。翌日新聞を見たら、「栄豊丸、平穩に上陸」と出ていた。我々にはもはやそんな余力の元氣など、どこにもなかった。時に八月一日朝まだきである。それから免疫、消毒、検診等が行われ、二日、金巻千円也を頂戴した。これが四年間抑留の労賃なのか、しかしこれは幾ばくの値打ちもないことが間もなくわかった。帰途列車の中にも、共産党に入党するのだとアジリ、共産党の支部のある駅に下車した者も数人いた。

帰還



今様浦島さながらに帰ってみれば、世の中は思っていたのと雲泥の差である。

帰った当時「異国の丘」と題した、抑留者の生き様を歌った歌謡を聞いたのであるが、その余りにも我々抑留者の実態とかけ離れた甘っちょろい歌声に抵抗を感じたものである。

父は、私が召集されてから毎日陰膳を据えて祈り続けてくれた。お陰様をもって二十四年八月、無事帰還することができた次第…。

“まなかいに陰膳据えて神に伏す

みおやのまこと胸にうずきし”

凍土と白樺の雪にしなう最果ての北限に、ひたすら郷里に思いを馳せ、肉親に、郷土に、そして短かった二十幾年の生涯を幾度となく思い返しては、遂にたどりつくことができぬまま国に殉じた幾多の夢多き御霊に、安らかな眠りに就かれんことを祈りつつこの一編を捧ぐ。

### 【執筆者の紹介】

本籍・住所 新潟県北蒲原郡紫雲寺町大字米子二七

学歴 高等小学校卒業

小学校教員

専検・宅建主任・測量士補の各試験合格

職歴 農業・町役場・日本電建・不動産業等

軍歴

昭和十五年十二月十一日 第二補充兵役編入

昭和十八年 一月二十一日 臨時召集により輜重兵

第二連隊補充隊に応召

編入

二月一日 下関港出帆

釜山港上陸

二月三日 鮮満国境通過

二月四日 牡丹江省寧安県海浪着

独立輜重兵四十五大隊

編入

八月七日 陸軍一等兵

昭和十九年 六月三日 蘭崗に移駐

八月七日 陸軍上等兵

昭和二十年 八月七日 陸軍兵長

八月十二日 蘭岡出発

敦化着

八月二十三日 敦化において武装解除

九月二日 吉林に収容、以後入ソ

昭和二十四年七月二十七日 ナホトカ港出帆

七月三十日 舞鶴港上陸

七月三十一日 復員

(新潟県 中村 甲)

## 日本人墓地

新潟県 平原 敏夫

シベリアではいつも腹が減っていた。冬の寒さは猛烈であった。作業は連日、カンボーイ（監視兵）の構えた自動小銃の銃口と、過酷なノルマ（割当作業量）に追われてきつかった。食い物のことと、帰りたい早

く一日も早く、の思いの他、頭のなかは何もなかった。雪で糧秣の補給が途絶え、降り積もった雪を溶かして沸かした白湯をすすりながら過ごした一日は、心細く随分と永かった。三日間、全然塩分のない食事しか支給されなかった時、加速がついて目がくぼみ頬はこけ、毛穴・汗腺が紫色に腫れ上がり、一挙手一投足が難儀になり口をきくのも億劫になってしまった。

昭和二十一年十二月三十日、大晦日の前日、氷点下五十度の極寒のなか夜間作業に駆り出された。氷点下五十度は、寒いというより全身がキリキリ痛かった。こうしたなかで無念、沢山の戦友が亡くなっていった。当時から既に五十余年の歳月が流れ去り、辛かった、苦しかった抑留生活中のさまざまの事象も、その記憶はだんだんに茫漠たるものになってきている。けれども、目の当たりにしてきた何人もの戦友の死は、忘れようにも忘れ去れるものでない。

昭和二十年十一月、日時は定かでない。初めて迎えたシベリアでの冬、寒さはいよいよ本格的になると、その寒さに耐えていくだけでも、相当の量のエ